

連載講座

第32回

江戸の木戸は放火防止柵

作家 童門冬二

元禄時代の俳聖と言われた松尾芭蕉の句に、「面白うてやがて悲しき鶉飼哉」というのがある。長良川あたりで、たいまつにあかあかと照らされて鶉匠が鶉を使って、鮎をとる行事が鶉飼だが、芭蕉にとってはこれが夜が更けるに従ってにぎやかなものよりもかえって寂しく悲しい思いをかき立てる詩魂があったのだろう。わたしはこの句を、「面白うてやがて悲しき神輿哉」

と読みかえている。祭が好きだ。特に東京浅草の三社祭には若いころからかなり魅かれる。後年には、顔のきく浅草の酒亭のおやじに頼んで、三社様（浅草神社）の神輿の宮出しから宮入りまで、お宮の隅で見物できる特別券を警察署からもらってもらったことがある。では神輿のどこが「面白くて悲しいのか」ということだが、悲しいというのは、夜が更けるに従って神輿が町々へ戻って行き、三社様の周りには一基も姿が見られなくなることをいう。が、本質的にわたしが悲しいと思うのは、あの担ぎ手たちの足踏みだ。かけ声は勇ましい。わっしょいわっしょいという声を上げながらも、神輿は一向に進まない。それは、かけ声に合わせて神輿がどんどん走っていかないからだ。足踏みをしている。その場でわっしょいわっしょいと言いながら、進行速度はかなり遅い。わたしはあれを、（江戸時代の、江戸市民たちの置かれていた立場だ）と思っている。江戸市民たちにそういう足踏みをさせた大きな都市施設は、なんと

いっても町々に設けられた「木戸」である。木戸はこれも町の自治組織である「自身番」の管理下に置かれ、夜十時になると引き出される。各町が木戸を引き出すから、空から見れば江戸の町は完全に木戸だらけになってしまう。言葉は悪いが、まるで檻のようだ。つまり夜の江戸は完全に“檻の町”になるのだ。設けられたのはかなり古く、慶長十四（一六〇九）年九月に、江戸湾で座礁したスペイン船の艦長ドン・ロドリゴがこのことに触れている。

「木戸は町の入り口にあり、主として放火犯の侵入を防止した。夜は十時に町で雇っている木戸番が閉じる。そして朝開ける。しかし夜間は完全に出入り禁止ではなく、病人を診たり赤ん坊の出産の面倒を見る医師や産婆などは、通行できる。このときは木戸番が潜り戸を開けて次の木戸へ拍子木を打って引き渡した」

と書いているから、関ヶ原合戦が終わって、大坂の陣が起こる前あたりにはすでに設けられていたようだ。慶安元（一六四八）年十二月二十一日の幕府の町触がある。

- 一 月行事（月ごとに自身番などでその町の事務を主宰する町役人）は夜番所へ見回ること
- 一 出火時は辻番に告げて連絡を各町に出すこと。もし辻番が寝ていたら捕らえて橋の上にさらし者にする
- 一 町ごとに水桶・天水桶に水を入れておくこと

一 二階で火を用いることを禁ずる

などという内容だ。徳川時代の江戸の運営は、もちろん幕府の江戸町奉行が主としてこれをおこなうが、その下部機関としてその町役人の自治に任せたことが多々あった。町では、会費を出し合っているいろんな経費に充てた。ただし、この費用負担者は名主などの町役人が分担して、いわゆる長屋の八つっあん熊さんには出費させなかった。よく言うように、「家主は親で、店子は子供だ」という関係を保っていたのである。木戸の存在によって、夜の江戸の町は完全に“檻の町”になり、江戸市民はその檻の中で朝まで暮らすことになる。しかし江戸っ子たちはそれは当たり前だと思っていたから、大して不自由な思いはしなかった。しかし心理的にはたとえそうであっても、やはり物的な圧力は感じたに違いない。それが、神輿を担ぐときの足踏みになってあらわれた。夜の“檻の

町”の秩序が完全に破られた大きな事件が一つある。赤穂浪士の吉良邸討ち入りだ。あの夜は、なぜか幕府が禁じている徒党を組み、しかも火事装束という武装をして、武器を携えた四十七人の浅野家の浪人たちが、堂々とこの江戸の町を行進して、吉良邸に討ち入った。吉良上野介の首をとり、さらに翌朝また本来なら檻の町であるはずの江戸の町を堂々と行進して、芝（港区）の泉岳寺まで引き揚げていった。これは明らかにその夜に限って、木戸が引き出されていなかったことを物語る。江戸市民の赤穂浪士に対する期待を一つの世論と見て、幕府首脳部が江戸町奉行に命じ、
「今夜は木戸を出すな」と命じたに違いない。木戸は確かに江戸の町の夜の治安維持のために役立った施設ではあった。しかしその動機が、
「放火犯防止のため」だったというのは興味深い。